100人に1人の私

岐阜市立青山中学校 3年
河村 花慧（かわむら かえ）

「100 人に1人の私」私の名前は、河村花慧です。今日は私の思いを話しに来ました。頑張って話すので、最後まで聞いてくださいね。

……どうでしたか？上手に話せていましたか？

私は吃音症です。幼稚園児の時から、今も続いていて、うまく話せないときがあります。

私が小学校の頃、日直として前で話したことがありました。その時、私の姿を見て笑ってきた子がいました。日直など、人前で話すときは普段の会話に比べ、たくさん詰まってしまってうまく話せません。そのときのことは、今でも覚えています。すごく嫌だったし、たくさん泣きました。私は、わざとやっているわけでも、やりたくてやっているわけでもないのに、どうしてこんな思いをしなければならないのだろうと……。家族や友だち、先生と話していても、周りのみんなはスラスラ話していて、「いいなぁ。私もあんな風に話してみたいなぁ。」って、すごく思うのです。小学生の時の嫌な思い出がずっと残っていて、今でも「変だと思われないかなぁ。あの子の話し方は聞きとりやすいのになぁ。」と考えてしまって、話そうと決めていたことでも、話すことを諦めてしまったこともあります。今では、バカにしてきたり、笑ってきたりする子はいないし、最後まで話を聞いてくれる子ばかりなので嬉しいです。私は、ただでさえ吃音が嫌だなって思いながら話しているのに、人前で話すときにすごく緊張するタイプで、バカにされたら話したくなくなります。逆に最後まで聞いてくれたら、「こんな私を受け入れてくれた！」って嬉しくなります。中には、私が何を言おうとしているのかを汲み取って、先に理解しようとしてくれる子もいます。だから、そんなときは穏やかな気持ちで会話ができるんです。本当に、友達には感謝しています。

ある時、私自身、この症状のことを何も知らないなと思ったので、インターネットでいろいろと調べてみたところ、「注文に時間がかかるカフェ」というのを見つけました。そのカフェは、元々吃音症だった人がオープンさせたお店で、接客業をやってみたいけれど、吃音を理由に断念してしまった人たちのために始めたようです。それを知って、私は率直に「いいなあ」と思いました。接客業は、人と人との会話で成り立つもの。普通のお店だったら、急かされたり嫌な顔をされたりしますが、このカフェだったら店員さんが吃音症の人と分かって来てもらっているので、安心して接客ができます。吃音を理由に、いくつかの選択肢を諦めてしまった人たちを「助けたい」「一緒にやっていきたい」って思って始めたことを知って、私も何かできないかと考える機会になりました。

調べる中で、同じ吃音症の人でも、思っていることは違うということを知りました。自分の話を最後まで聞いてほしい人もいれば、途中で助け舟を出してほしい人もいる。中には、「リラックスしてね」という言葉さえもプレッシャーに感じる人もいる。

しかし、それは吃音の人だけの話ではないと思います。この中にも、「大丈夫？リラックスしてね」と言われると、かえって緊張してしまう人はいませんか？私の学校の先生の中にも、そんな方がいます。話すときに緊張することがあるので、そんな時は、教室の後ろのロッカーを見ながら話すこともあるよと教えてくれました。

一方、私は、合唱やカラオケみたいに、みんなと盛り上がる場面では、まったく問題なく歌えます。緊張の和らげ方も、人との関わり方もいろいろ。だから「関わる」って難しいんですよね。

今の私は「吃音」というラベルが自分自身についていると思います。でも、それを、周りの仲間がサポートしてくれます。

吃音症は 100 人に1人といわれています。しかし、吃音への理解が深まることは、100 人に1人の私だけが、あるいは同じ症状の人だけが幸せになる世の中ではないはず。吃音への付き合い方を考えることは、誰もが幸せな人生を送り、より良い世の中を築くことにつながるはずです。